〔研究ノート〕

新疆トルファン地方のイスラム化と仏教衰退
－中国新疆イスラム教小史⑤－

丸山　鋼二

〔Research Notes〕

Islamization of Turpan, Xinjiang：A Short History of Islam in Xinjiang ⑤

Koji　MARUYAMA

Abstract

Having conquered Kucha and propagated Islam there in the middle of the fourteenth century, the Islam Force completed the "holy war" to Turpan around 1392, the period of Khizr Khoja Khan of Eastern Chaghatai-Khan Khanate. Karakhojo situated at the Turpan Basin where Buddhism was prospering made a military resistance to the attack. As a result, Karakhojo, the capital of the Tienshan Uighur Kingdom had been thoroughly destroyed after the occupation. Priests were driven out, and all the temples and Buddhism property were destroyed completely. Thereafter, Karakhojo came down quickly and never revived again. Today, Karakhojo is left behind only as a famous tourist spot, Gaochang Ruins. On the other hand, the present Turpan City abandoned resistance at that time. So it remained without damage and the existence of Buddhism was allowed for a period of time. However, since Turpan was the center of the reign of the Eastern Chaghatai-Khan Khanate, Buddhism had been eliminated completely and replaced by Islam after decades of years. As an Islamic city, Turpan has been prospering until now.

はじめに

12 世紀初めまでに、イスラム勢力は新疆タリム盆地の南西部、カシュガルからホータンまでの地域を征服することには成功したが、その後約 200 年間アクスから先、東方のクチャには進出できなかった。1347 年即位した東チャガタイ汗国初代のトゥグルク・ティムール・ハーンは、クチャへのイスラーム伝道を支援した。イスラム教はモグール（モンゴル）遊牧民に対する改宗には成功したが、それは表面的なもので、イスラムの信仰・宗教規則・律法（シャリーア）がモグール人たちを束縛することはできなかった。また、移動生活に慣れた彼らはイスラムへの改宗後も、都市や農村に定住しているムスリムを軽蔑し、定住民たちを遊牧民のために奉仕する下層階級と見なしていた。草原にモスクやイスラム法廷を設置すること自体が困難で、イスラム聖職者を満足させることからはほど遠かった。そこで、エシュディン・ホージャは豊かなオアシス農耕地帯であるクチャへの伝道を目指し、伝道隊「クチャ・イスラム教社団」を組織し派遣した。イスラム伝道隊の熱狂的な布教活動や強制的な改宗運動はクチャの仏教徒たちの反乱を引き起こしたが、トゥグルク・ハーンの軍により鎮圧され、クチャの仏教勢力は外地に駆逐され、ここにクチャのイスラム化が達成された。

そのイスラム化の過程で高度なクチャの仏教文化遺産は破壊されたが、クチャ地区における仏教衰亡とイスラム教の興起は新疆宗教史上の大事件であった。それはクチャがイスラム教地区となったため、新疆最後の仏教中心地であるトルファン地区は防衛のための障壁を失ったからである。トルファンのイスラム化も時間の問題であった。以上が、前稿(『文教大学国際学部紀要』第22巻第2号、2012年1月)で指摘したことである。

クチャに対する征服と布教を完成させたイスラム教勢力にとって、次の目標はトルファン地区であった。トルファンに対する戦争を完遂したのが、東チャガタイ汗国のヒジル・ホージャ・ハーン(在位1383 ～ 99年)であった。

本稿では、最初にトルファンの自然・歴史および宗教・仏教遺跡について説明した後、第3節でトルファン・ハミに対する聖戦(「ジハード」)を、第4節でトルファン仏教の命運について、その没落の原因と消失の過程を、第5節でトルファンのイスラム化について述べる。

なお、新疆の地名やイスラム用語に対する中国語の表記は()で示した。

1　トルファン地区の自然と歴史

①トルファン市の自然と行政

トルファン地区は、新疆の中央部を東西に横切る大山脈、天山山脈の支脈ボグダ(博格達)山南麓のトルファン盆地にある。盆地の大きさは東西約200km、南北約70km、面積5万平方キロである。南部は低山やゴビ砂漠(礫砂漠)からなっている。盆地北部の山脈は海抜3,500 ～ 4,000 m、最高は5,600 mに達している。これに対して、盆地中央部はほとんどが海抜以下である(3,400平方キロ)。トルファン市はほぼ海面と同じ高さにある。

トルファン市の南郊約30kmにあるアイディン・クルAidin Kul(艾丁湖)は海面下154 mで、中国大陸で最も低い窪地で、世界でも死海に次いで世界第二位の低地にある湖である。アイディン湖の旧称は「覚洛浣」で、ウイグル語で「月光湖」を意味する「アイディン・クル」(艾丁庫勒)と呼ばれており、現在の名称の起源となっている。面積は152平方キロ、湖面および湖底の高度はそれぞれ海面下154 m、155 mであるから、湖にほとんど水はないことが分かる。湖面は一面真っ白で透き通って輝き、弓張月(ゆみはりづき)の形をしていることから、この名称がついた。現在は湖水がますます枯渇し、大部分の湖面はすでに塩の層となっている。春の訪れとともに雪解け水が流れ込むと湖になるが、夏までには完全に蒸発してしまい、干上がった湖底では至るところに塩の結晶が目につく。湖周の大部分は塩田の浜、アルカリ性土壌、砂丘となっている。

トルファン盆地のなか、トルファン市の街の東方に、孫悟空たちが活躍したことでその名がよく知られている火焔山がある。名称は「山」であるが、長さ100km、幅10kmにおよぶ、赤褐色の立派な山脈である。ただ高さは平均500mほどで、最も高いところでも勝金口(1)付近の851 mである。現地のウイグル人たちも、「赤い山」という意味で「クズロダゴ」と呼んでいる。地殻の褶曲運動によってひだの入った赤い山肌は、夏場になると、太陽の光が山に照り輝いて赤く見え、地表から立ち上る陽炎や熱気が上昇する様は燃えている火炎のようである。その情景は、まさに「火焔山」の名

(1)勝金口はトルファン市東方、火焔山にふもとにある。なお、現在は蘭新鉄道の駅として新しくつくられた、勝金台鎮(旧称勝金口)がある。ここは綿花を産し、ブドウが特産である。

にふさわしい景色である。

今日、行政的にはトルファン地区行政公署の管轄下に、トルファン盆地中央部のトルファン市(人口約24万人)と西部の托克遜[トクスン]県(人口約10万人)および盆地東部の鄯善[シャンシャン]県(人口約20万人)の、1市2県がある。トルファン地区行政公署はトルファン市に置かれている。民族別では、ウイグル人が人口の約7割を占めている。

ここでは、主にトルファン市の自然について述べる。なお、学術界ではトゥルファンという表記が用いられる傾向にある(2)が、本稿では「トルファン」という表記を使用する。

トルファン地区は温暖乾燥型の荒漠気候である。トルファン市の年平均気温が14.1℃、年間の降水量はわずか15㎜、それに対して蒸発量は2,714㎜、日照時間2,999時間、無霜日数は256日、30度以上の高温日数は146日を数える。このように、この盆地はいにしえより炎暑の地として聞こえ、最高気温が48.1℃、地表温度は70度に達し、乾燥・高温・多風の故にしばしば「火州」(ホージャ)と呼ばれてきた。

水系は天山水系と火焔山水系があるが、乾燥した大地のオアシスに天山山脈から水を送っているのはカレーズ(坎児井)という地下用水路である。シルクロードの点在するオアシス都市は水系によって3つに分けられる。1つは河川の水を利用したオアシスで、カシュガルやホータンなどがこれに当たる。1つは湧き出る泉を利用したオアシス。最後がカレーズと呼ばれる地下水路を利用したオアシスで、トルファンはこのタイプを代表するオアシス都市である(3)。

カレーズはペルシア語で「掘って水を通す施設」を意味する。氷山の雪解け水を乾燥地へ導くために30ｍ間隔くらいに深さ30ｍ位の井戸を掘り、各井戸の底を勾配をつけて暗渠で結ぶことにより流れる水を蒸発から守り灌漑用に使えるようにしたものである。今日でも、ウルムチからトルファンに赴く途中、地表に出ている井戸をみることができる。乾燥地帯では地表の蒸発が激しいので、地下を通すことで大切な水を効率よく運ぶことができるようにした人間の知恵である。また、地表を流れると、地表の塩分を含んでしまって、農業用水として役に立たないことになる。井戸の底に泥や砂利がたまるので、時々カレーズの底の清掃が必要である。カレーズは、イランではカナート、サハラではフォガラと呼ばれている。トルファンでは1,200本ものカレーズが確認されており、その総延長は約5,000kmにもおよぶ。まさに「地下の長城」として2,000年の風雨に耐え、今に受け継がれている。かつては豪族や地主が掘って、水を使う農民から水税を徴収していたが、現在は人民政府が管理している。現在では河川からの取水や深井戸からのポンプ揚水が農業生産の増大に貢献し、カレーズと交替し始めている(4)。

乾燥した気候のため、トルファン市の管轄する地域内での森林被覆率はわずかに0.9％である(5)。しかし、こんなに極端な乾燥気候の中にあっても雪解け水とそれを運ぶカレーズのおかげで、トル

(2)『アジア歴史事典』第7巻、平凡社、1961年、105頁「トゥルファン」の項、および長澤和俊編『シルクロードを知る事典』東京堂出版、2002年、234頁「トゥルファン―天山南麓東部のオアシス」、『中央ユーラシアを知る事典』平凡社、2005年や小松久男編『新版世界各国史4 中央ユーラシア史』山川出版社、2000年では、「トゥルファン」という表記を使用している。

(3)『地球の歩き方　西安とシルクロード1999～2000版』ダイヤモンド社、1999年改訂第7版、198頁。

(4)岡内三眞編著『シルクロードの考古学』早稲田大学、2008年、29頁。胡楽人著『新疆ウイグル紀行』御園書房、1999年、104頁では、700本ほどのカレーズが、総延長2,000kmにおよぶと記されている。

(5)閻常年主編『中国市県辞典』北京・中共中央党校出版社、1991年、1285頁、「吐魯番市」の項。

ファンは農業が盛んで、主に葡萄・ハミ瓜・小麦・トウモロコシ・白高粱・綿花・野菜を栽培している。葡萄の種類は乳頭のような形をしていることから「馬乳葡萄」(マーナイズ馬奶子)と呼ばれる種なし白葡萄の品種が有名である。甘みは少ないが水気が多い。田園地帯では、煉瓦を交互に組み合わせて風通しを良くした茶色の葡萄乾燥小屋がよく見かけられる。小屋の大きさは高さが8ｍ、幅が5ｍくらいである。畑から収穫され籠に入れられてロバ車で運び込まれたブドウの房をこの小屋に1ヶ月ほどぶら下げておくと、軸のついた甘酸っぱい干しぶどうができあがる。ブドウの産地であることから、当然赤ワイン・白ワインが当地の特産品であり、1990年からは「葡萄祭り」が行われている。また、綿花は長絨棉が有名で、トルファンは全国長絨棉生産基地の一つである。盆地東部の鄯善県は「果実の郷」として著名で、とくに「ハミ瓜の郷」として内外に知られている。また鄯善県では、その風景区として「砂山」という意味の「クムターグ」(庫木塔格)砂漠があり、鄯善県城(鄯善ピチャン鎮)では「沙山公園」が観光名所としてある。

交通の面では、トルファン市は蘭(州)新(疆)鉄道という幹線鉄道および蘭(州)新(疆)公路[国道312号]が通っている交通至便な都市である。また、今日、蘭(州)新(疆)鉄道と南疆鉄道の接続点ともなっている。蘭州鉄道はかつてのシルクロードからは北方のルートに建設されたため、火焔山の北側を通っており、トルファン市内から北西70kmのところにある大河沿駅が最寄りの駅となっている。蘭新鉄道の通っている鄯善県でも、新たに鄯善火車站がつくられ、今日鄯善県の重要な鎮となっている。

トルファンの名所としては、高昌故城、交河故城、ベゼクリク(柏孜克里克)千仏洞、勝金口千仏洞、蘇公塔、アスターナ(阿斯塔那)古墓群などがある。

②トルファンの歴史とトクスン県・鄯善県

トルファン盆地は南下する北方遊牧民族の勢力と西域経営に進出した中国諸王朝が争ったところで、漢代には車師前国があり、シルクロード西域北道の起点となった。車師前国はトルファン西方のヤール・ホト(交河故城、ヤールはウイグル語で崖の意)を拠点としていた。車師前国は、本来天山北方の遊牧民であった車師(姑師)人の一部がトルファン盆地に南下して、半農半牧の生活に移行していたと推測されている。考古学的発掘により、かれらは人種的にはコーカソイド種の特徴を有していることが今日明らかにされている。車師前国は当初、匈奴の勢力下に置かれていたが、前1世紀に前漢が匈奴を駆逐して盆地東域に高昌壁あるいは高昌塁とよばれる要塞を設けて屯田を開始した。この屯田の地は消長しながらも流入する漢人を受容し続け、4世紀初頭、五胡十六国の前涼のとき高昌郡の設置を見る。

その後、北魏によって滅ぼされた北涼(397 ～ 439年)の王族・沮渠氏が逃れてきて、442年高昌国を建て、高昌城(高昌故城)を築いた。沮渠氏は仏教保護者として知られている。高昌国は450年、車師前国を併合して、盆地を統一した。交河城は高昌国の軍事を中心とした副都となった。高昌国は漢人と自認する在地豪族層を基盤として、麴氏に至る5王朝が交替した。640年に高昌国は唐に滅ぼされ、ここは唐の直轄領の1州として西州と名付けられ、その管下に5県が置かれた。また、交河城には安西都護府が一時置かれて、西域経営の拠点とされた[(6)]。

(6)高昌国の歴史については、陳舜臣が「火焔山のほとり　高昌国興亡記」(NHK取材班著『シルクロード第五巻　天山南路の旅：トルファンからクチャへ』NHK出版、1981年)で要領よくまとめている。

8世紀後半、唐勢力が後退して、ウイグル(回鶻)と吐蕃が西域争奪を争うようになると、トルファンは混乱の渦中に陥った。9世紀半ばにモンゴル高原で強勢を誇っていた東ウイグル帝国が崩壊し、ウイグル人(回鶻)が西遷を始めると、遊牧ウイグル人がトルファン盆地にも大量に流入した。その時の天山南路の主な住民はイラン系であった。彼らの用いたトカラ語はインド・ヨーロッパ語族に属するもので、それもケントゥム語群という、インド語やイラン語よりもギリシア語・ラテン語・ゲルマン語などの方に近く、西アジアを越えてもっと西との結びつきの強い人種であったと推測されている。ウイグル人の大量流入と定住化により先住民の言語がトカラ語からトルコ語に変わったので、ウイグル人の流入はタリム盆地にとってはまさに民族の大移動ともいうべき性格のものであった。

遊牧ウイグルの一派が天山南北に西ウイグル王国(天山ウイグル王国)を建国すると、トルファンは東西交易の要衝として復活し、ベゼクリク千仏洞の造営にうかがえるような繁栄を回復した。ウイグル商人は甘粛の甘州ウイグル王国近くの敦煌にまでいたり、契丹や宋と朝貢貿易を行なった。テュルク遊牧民の称号「テングリ」を保持していたウイグル王は遊牧民の伝統にならい、ビシュバリクと高昌を季節ごとに往来し、北麓には王侯の馬群が無数に放牧され、南麓は豊かな農業で繁栄していた。天山ウイグル王国は遊牧民がオアシス地域に定着した典型であるが、遊牧文化と定着農耕都市文化が見事に融合された。ウイグル人は多くの文化を同時に受け入れることができたので、各宗教の相互影響により混合現象が生まれて「混然一体の合成文化」を形成した。中国の史書では、宋末に「輝和爾」(ウイグル「畏吾児」)という呼称が出現している。

西ウイグル王国は13世紀の初めにモンゴル帝国のチンギス・ハーンに自ら帰順を申し出たため、ウイグルの王統は保障されて14世紀まで存続したが、のちフビライの頃に王は甘粛に移された。トルファンは元代には、和州、火州(いずれも高昌の訛音)、カラ・ホージャ(哈剌火者)などと呼ばれた。トルファンの名があらわれるのは明代の記録からであるが、元代に万戸府あるいは畏吾都護が置かれたといわれ、現在のトルファンの街が城邑として発達したのは元代からとみられる。それまでは、トルファン市の東西にあった高昌と交河の両城が当地の中心都市であった。

明代には、中国王朝はトルファンにまで支配を及ぼすことはできなかった。清代に入り、この地は清とジュンガル部との抗争の地となり、盆地の住民は一時瓜州や粛州に移り、清のジュンガル平定後に故土に帰ってきたという。トルファン盆地は清乾隆年間に征服されると、「吐魯番六城」とよばれる6つの都市に整備された。すなわち、ピチャンPichan(辟展、現鄯善県)・広安城(現トルファン)・魯克沁・色更木(現勝金)・カラホージャ(哈剌和卓)・トクスン(托克遜)である。清乾隆24年(1759年)、甘粛布政司の隷下に辟展弁事大臣と同知が置かれ統治に当たった。乾隆44年(1779年)、辟展弁事大臣は吐魯番領隊大臣と改められ、場所もトルファン城(広安城)に移され、ウルムチ都統に属した。領隊大臣は当地に駐留する満営事務を管理していた。この時、従前からの回城の東隣に漢城(広安城)が築かれた。近代になって、光緒10年(1884年)、新疆省が設置されると、軍隊(満営)の縮小・改編により吐魯番領隊大臣は廃止され、同12年(1886年)吐魯番直隷庁が設けられ、迪化府に属した。民国2年(1913年)、吐魯番県に改められ、中華人民共和国成立後の1985年5月25日にトルファン市に昇格した(7)。

他方、トクスン県は「九台」と俗称されるが、唐代には天山県が置かれていた。清の光緒33年(1907

(7)前掲書『中国市県辞典』1285頁、「吐魯番市」の項。

年)、吐魯番直隷庁の西郷として区画され、1920年にトクスン県佐がおかれた。1930年に焉耆道に属する托克遜設治局に改められた後、民国25年(1936年)迪化行政区所属のトクスン県に独立・昇格させた[8]。

鄯善県はいにしえよりシルクロードの拠点として知られ、唐代には西州の柳中県と菖蒲県であった。宋代には高昌回鶻(西ウイグル王国)に属し、元代にはルクチャック(魯克察克、現在の魯克沁)や柳城となった。明の正統年間の時期に吐魯番に編入され、吐魯番の一部となった。清の乾隆年間に辟展弁事大臣や辟展巡検等が置かれた後、1902年(光緒28年)に辟展(ピチャン)と魯克沁(ルクチン)[9]を分離・独立させて鄯善県が置かれた。現在の鄯善県から南方のロプノールにあった楼蘭王国の場所もかつて鄯善と呼ばれていた。そのため、鄯善という名称は16世紀までは楼蘭を指し、17世紀以降は現在の場所を指すに至っている。ピチャンという名は、唐代に設置された菖蒲県の音訳とか、ウイグル語のネジアヤメ(馬蓮草)に由来すると言われている。鄯善県は民国期は焉耆道や迪化専署に、中華人民共和国成立当初も迪化専署および改称した烏魯木斉専署に属した。1958年に新疆ウイグル自治区の直轄県に改められたが、1970年にハミ地区行政公署の管轄に移された。1975年、現行の吐魯番地区の所属となった[10]。

２　トルファンの宗教と遺跡

①イスラム化以前のトルファンの宗教状況

ウイグル(回鶻)の西遷以前、トルファン盆地の住民の宗教信仰は祆教(拝火教、ゾロアスター教)、仏教、道教など多様であった。仏教は4世紀に当地に本格的に伝来した。4世紀後半、車師前国では仏教が国教とされ、大乗仏教が信仰された。その後の支配者たちも熱心に仏教の普及につとめた。とくに6～7世紀中葉の麴氏高昌国時代(501～640年)、高昌国の国運が栄えたうえ、仏教はさらに王室の保護と崇拝を受けたため、仏教はますます隆盛に向かった。高昌仏教は于闐仏教および亀茲仏教とともに西域三大仏教盛地であった。

9世紀半ば頃に西ウイグル王国が成立した後、ウイグル人たちはさらにマニ教をトルファン地区にも導入し、領内では仏教・マニ教・景教・祆教・道教等が併存していた。トルファンで支配者となったウイグル人は、略奪や殺戮といった武力による制圧でなく、多様な文化を吸収し融合するという高度な文化政策で王国を築き上げた。その中心に置かれたのが仏教で、和をもって尊しとなすという和平の思考システムをもって、言い換えれば統治の手段として仏教が有効に働いたと考えられる[11]。

西ウイグル王国では各宗教が併存していたが、中心的な宗教は次第に仏教となっていった。982

(8)紀大椿主編『新疆歴史詞典』烏魯木斉・新疆人民出版社、1994年、193頁「吐魯番六城」の項、194頁「吐魯番領隊大臣」の項。前掲書『中国市県辞典』1286頁、「托克遜県」の項。ほかに『アジア歴史事典』第7巻、105頁「トゥルファン」の項、および『中央ユーラシアを知る事典』196頁「高昌国」の項、380-381頁「トゥルファン」の項、407頁「西ウイグル王国」の項を参照。

(9)今日、魯克沁(人口2万2,000人)は1985年に鎮となり、鄯善県での集市貿易の中心の一つである。

(10)前掲書『中国市県辞典』1286頁、「鄯善県」の項。

(11)堅達京子「第2集　トルファン　灼熱の大画廊」、NHK「新シルクロード」プロジェクト編著『NHKスペシャル　新シルクロード1　楼蘭：四千年の眠り／トルファン：灼熱の大画廊』NHK出版、2005年、178頁。

年、北宋の王延徳が高昌に使わされたが、かれは当時のトルファンについて、「仏寺は50余り、みな唐朝より賜った額を掲げている。寺には大蔵経(だいぞうきょう)・『唐韵(とういん)(唐韻)』・五篇(『玉篇(ぎょくへん)』)・経音(きょうおん)等がある。またマニ寺やペルシア僧(祆教を指す)がそれぞれその教法を奉じており、仏教経典は外来のものである。」と報告している。50余りの仏寺は人口が多くはない高昌にとっては数量的に見るべきものであり、当地の仏教隆盛の状況を十分説明している。が、同時に、10世紀後半には、ここに、仏教・マニ教・ゾロアスター教・ネストリウス派キリスト教・道教・儒教の6つの宗教が共存していたのでもある。西ウイグル王国は多民族多宗教が当たり前に共存する、豊かな王国だったと言えよう。ドイツの探検隊は、17種の言語が24種の文字で書かれた文書や経典を発見している。ここは、幾多の民族が出会う国際都市だったのである(12)。

イスラム教がトルファン盆地に本格に進入し始めていた14世紀になっても、依然として仏教が行われており、イスラム教は高昌ウイグル王国に対しては大きな影響はまだ与えていなかった。ウイグル仏教は中国仏教やトカラ仏教の影響を受けてきたが、モンゴル帝国時代には元朝皇室によるチベット仏教崇拝の影響により、ラマ教(チベット仏教)がトルファン盆地に伝えられると、チベット語の仏典からの翻訳など、高昌仏教に一定の影響を与えた。

②トルファンの仏教遺跡

西ウイグル王国はウイグル仏教王国とも呼ばれるくらい、仏教文化が繁栄した。西ウイグル王国の夏の都(北都)ビシュバリク(「5つの街」の意。現北庭古城)の西400mのところに仏教寺院遺跡(今日、西大寺と呼ばれる)が残り、そこから仏龕(ぶつがん)(仏像をいれておく厨子)やウイグル時代の仏教装飾壁画やウイグル語の碑文が発見され、なかには金箔貼りのウイグル王像(金色の衣を着た供養者の像)も含まれている(13)。

高昌故城は、市内からミニバスで小1時間ほど離れたところにある。ここはかつて漢人植民国家の高昌王国、唐の西州都督府、西ウイグル王国の冬宮(南都)と、それぞれの時代における中心都城として長期間(5～14世紀)繁栄してきた。そのため、トルファン盆地最大の都市遺跡として高昌故城が残っている。故城からは、仏教文献(写本・印本)や諸種の公文書をはじめとする文書類のほか、絹・麻・紙に書かれた絵画あるいは壁画・彫刻類が数多く発見されている。高昌故城は周囲約5kmの城壁に囲まれ、東西1,600m、南北1,500mのほぼ正方形である(14)。内部は外城・内城・宮城・寺院・住居などがあり、王城址は「可汗の宮殿」と呼ばれる遺跡で、寺院は仏教寺院以外に景教寺院やマニ教寺院跡も残っている。建物の壁は日干しレンガで築かれているが、痛みが激しく、ほとんど原形を留めていない。広大な土地に荒涼とした風景が広がる(15)。故城の北方約1kmには広大なアスターナ古墳群があり、様々な文物を出土している。

アスターナ古墳群は、高昌王国の王侯貴族と唐代西州住民の墓群である。アスターナは首都とか休息とかの意味だという。この墓地には500の墓があり、うち300ほどが発掘され、現在も発掘作業は進められている。見学用の墓地として3カ所が公開されているが、3mほどの深さのある墓室

(12)堅達京子、前掲「第2集　トルファン　灼熱の大画廊」、173頁。
(13)前掲書『中央ユーラシアを知る事典』442頁「ビシュバリク」の項。
(14)前掲書『シルクロードを知る事典』237頁。
(15)前掲書『地球の歩き方　西安とシルクロード1999～2000版』196頁。

に、15度の傾斜で20ｍほど地下にはいる参道がつけられており、堅固な石で囲まれて2坪ほどの広さ（高さ3ｍ、四方3.6ｍ）がある。平面的には「甲」の字形をしている。真ん中にミイラと化した死体が2体置かれ、周囲の壁には生前好きだった花や鳥の絵、四聖人図などが描かれている。まさに「地下博物館」と言ってもその名に恥じない。

四聖人図とは、「玉人」「金人」「石人」「木人」と名付けられている、それぞれが特有の人格を表現している聖人である。「玉人」はきわめて清廉潔白な人格を、「金人」は言を慎むべきことを、「石人」は石のごとく寡黙だが、市井に混じってもものに動じない人格を、「木人」は愚直なほどに正直な人格の持ち主であるという。これらはいずれも儒教の教義を絵解きしたもので、かつて各地の孔子廟には四聖人として銅像に仕立てられ置かれていたという。この四聖人図は、仏教が盛行していたトルファンにおいても儒教という中国中原の中心的な文化がこの辺境の地にも浸透していたことを知るに十分な題材である(16)。

アスターナ古墳群から出土したトルファン文書の中に見いだされる仏典はごくわずかで、世俗文書がそのほとんどを占めている。しかし、トルファン文書は、トルファンにあった寺院や僧侶の存在形態や日常についても教えてくれる。トルファン文書から確認できる寺院は178を数えるという(17)。

交河故城は、現トルファン市街から西方10km、すでに砂漠地帯の一角ともいうべき中に、二つの河床にはさまれた高さ20 ～ 30ｍほどの断崖上に作られた都市遺跡である。南北に1,760ｍに細長く伸びた船形をしており、その間の幅が最も広いところでも約300ｍほどしかない。漢や唐の時代には、豊富な水量をたたえた河がこの城を囲むようにして流れていたという。今日は、風化し崩れかけた砂壁の大群が、乾いた何もないだだっ広い大地の中、一人忽然と存在する(18)。城の構造は崖上に位置しているため城壁がないが、南端と東側・西側に城門が存在している。城内の遺構は寺院区・居住区・官署区に分かれている。故城の北部にある寺院区は、中心に伸びる大道の北端に位置する大寺院とそれ以北に広がっている。大小の仏教建築遺跡が50カ所余りが確認され、中には地下に作られた寺院の遺構も存在する。ここから、漢文文書のほか梵文と古チベット文が記された泥の仏塔が出土した(19)。道ばたよりも低い位置に造られる、こうした半地下の部屋は現在のトルファンの住宅でも見られ、昼寝や食物の保存のために使われている。

高昌故城の東にあるトヨク石窟は、野外の煉瓦積み寺院と合わせて一大寺院群をなしていた。現在残っている約50窟のうち10窟ほどに壁画が残されている。石窟からは漢文・ウイグル文・チベット文など多くの写本類が発見され、そのなかには仏教経典のほかにマニ教やネストリウス派キリスト教のものもあった。また、盛唐美術の影響の著しい刺繍や絹本の仏画、絹織物なども発見された。

トルファン盆地で最も有名なのがベゼクリク千仏洞である。ベゼクリク石窟はムルトゥク河右岸の断崖に開かれており、40ほどの石窟からなる。この石窟寺院群はシルクロードの一大国際都市であった高昌に付随して営まれた宗教的聖地であった。それは敦煌に対する莫高窟、クチャ（亀茲

(16) NHK取材班「熱砂のオアシス・トルファン」、前掲書『シルクロード第五巻　天山南路の旅：トルファンからクチャへ』102-104頁。
(17) 橘堂晃一「第2章　東トルキスタンにおける仏教の受容とその展開」、『新アジア仏教5　中央アジア：文化・文明の交差点』佼成出版社、2010年、98頁。
(18) 生島佳代子著『タクラマカン縦断紀行』連合出版、1998年、134頁。
(19) 前掲書『シルクロードを知る事典』235-236頁。

烏)に対するキジル石窟やクムトラ石窟の関係と同じである。ル・コック率いるドイツ隊(トルファンを中心的に発掘したので、トルファン隊ともいわれる)、ヘディン・スタイン、大谷探検隊によって多くの壁画が切り取られ、現地は痛々しい状況にある。キジル壁画との関連性をうかがわせる壁画も一部あるが、大半は唐風の画風に独特の様式をみせるウイグル仏教絵画で、テーマも誓願図と呼ばれる構図が多い。なかにはマニ教窟であった石窟が、のちに仏教窟に改造されたものもある。ウイグル貴族を表す供養者図も多く、ベゼクリク石窟が西ウイグル王国時代に盛んに造営されたことがわかる[20]。

3　ヒジル・ホージャのトルファン聖戦(ジハード)

14世紀になってもイスラム教は高昌ウイグル王国に対しては大きな影響は与えていなかったが、同世紀末にトルファンはイスラム勢力についに征服されることとなった。東チャガタイ汗国(モグーリスターン・ハーン国)のヒジル・ホージャ(黒的爾火者)・ハーン(在位1383～1399年)が、トルファンに対して「聖戦」を仕掛け武力でもってここを奪い、住民にイスラム教を強要したとされる。ところが、ヒジル・ホージャのトルファン進攻の状況については詳細な記述が残されていないため、不明の部分が多い。諸種の史料の分析から「聖戦」が行われたのは1392年頃とみられている[21]。

ヒジル・ホージャは初代トゥグルク・ティムール・ハーンの幼子で、父の死後の1363年にドグラト部の反乱により皇室の成員が殺害される場に遭遇し、一時天山南麓に隠れていた。ドグラト部の反乱失敗に伴い、かれは部衆からハーンに擁立された。西のチムール王朝とは友好を維持し、1391年には明朝にも朝貢使節を送り友好を演出していたこともあった。

『ターリーヒ・ラシーディー(ラシッドの歴史)』はこの戦争を以下のように述べている[22]。

> 「ヒジル・ホージャの在位中に、かつて聖戦(ジハード[志哈徳])を行ってヒターイ(中国語は「契丹キタイ」、明朝が管轄していたトルファン等を指す)を攻撃した。かれは自らヒターイの二つの国境都市カラ・ホージャ(哈剌和卓)とトルファン(土魯番)を攻撃・占領し、当地の住民にイスラム教に帰依するよう強制した。したがって、この二つの地方はダール・アルイスラーム(Dar al Islam、達爾・阿勒・伊斯蘭)と呼ばれた。モグール諸ハーンの駐地としては、この地区の重要性はカシュガル(哈実哈爾)に次ぐものであった。そのほか、この戦争においてこの地区は神聖なイスラム教の戒律に基づいて分割された。このハーンの手中に落ちたのは、一面の錦緞(金襴緞子)と一頭の灰になった牛である。ハーンの目的はイスラム王国のために栄光を添えることであった。」

この「聖戦」以後、トルファンはイスラム教の勢力圏内にあると、イスラム世界では一般には認識されている。

カラ・ホージョ Karakhojo(哈剌和卓、哈剌火州)とはかつての高昌ウイグル王国の都城を指し、

(20)前掲書『中央ユーラシアを知る事典』294頁「千仏洞[新疆(トゥルファン)]」の項。

(21)≪中国新疆地区伊斯蘭教史≫編写組編著『中国新疆地区伊斯蘭教史[第1册]』烏魯木斉・新疆人民出版社、2000年、229頁。米児咱・馬黒麻・海答児『中亜蒙兀児史－拉失徳史(第1編)』新疆人民出版社、1983年、225頁、より重引。

(22)李進新著『新疆宗教演変史』烏魯木斉・新疆人民出版社、2003年、310頁。米児咱・馬黒麻・海答児『中亜蒙兀児史－拉失徳史(第1編)』新疆人民出版社、1983年、225頁、より重引。

現在の高昌故城のことである。高昌故城はトルファンの街から東40kmの位置に、前漢末から移住してきていた漢人たちが5世紀に植民国家を建設するために城壁を築いたのに始まる。周囲6km、高さ11m、厚さ12mの城壁は今も残されている。城壁はタマリスクや枯れ草を混ぜた土壁である。上記史料中のトルファン(土魯番)とは、現在のトルファン(吐魯番)のことである。

「ダール・アルイスラーム」は「イスラムの家」「ムスリム居住区」を意味するアラビア語からの音訳で、「戦争の家」「非ムスリム居住区」を意味する「ダル・アル・ハルブ(哈爾白)」と対になっている。したがって、「この二つの地方はダール・アルイスラーム(Dar al Islam、達爾・阿勒・伊斯蘭)と呼ばれた」という記述は、トルファンがイスラム教地域であることが認められたということであった。

「ダール・アルイスラーム」の成立要件は、①統治者がムスリムであること、②イスラーム法が施行されていること、の2条件である。ダール・アルイスラームでは、刑法や商法など公的領域におけるイスラーム法の遵守を条件に、異教徒にも信仰・儀礼および身分法上の宗教的自治が認められ居住が許されるので、実際にはイスラム主権下の諸宗教共同体が共存している社会でもあった[23]。そこに、トルファン仏教がまだ生存できる空間が残されていたということである。

イスラム勢力のトルファン占領は仏教勢力にとって大きな打撃となったが、仏教がすぐに衰亡したというわけではなかった。もう数十年間(約60～70年間)、仏教はイスラム教と併存していたが、15世紀後半に仏教はトルファンから完全に消失した。イスラム勢力は10世紀にカシュガル地域を支配してから、ウイグル人の2つの主要な居住地域(カシュガル・ホータン地区とトルファン地区)をイスラム化するまで、約500年かかったことになる。

ヒジル・ホージャのトルファン聖戦の状況は明らかでないが、民間伝承によるとこの聖戦はエシュディン・ホージャ家の活動と密接な関係があるという。エシュディン・ホージャはトルファンにも聖職者を送ってイスラム教の布教活動を行なったが、当地住民の抵抗に遭った。そこで、エシュディン・ホージャの子ウフルパティヒディン(烏甫爾帕提黒丁)はハーンの駐地に行って、ヒジル・ホージャと相談した。ヒジル・ホージャは軍を派遣してトルファンを攻撃することを決定した。伝えられたところによると、まず東方に位置するカラ・ホージョ城を攻撃した。カラ・ホージョ城は3重に囲まれても、城内の軍民は強く抵抗したが、ムスリム軍の侵攻を食い止めることはできなかった。その後、ヒジル・ホージャは兵を率いてトルファン城を攻めたが、こちらは軍民が抵抗を放棄し、戦わずに降伏した[24]。トルファン城の攻撃の際には、アイブナサールディン・ホージャ(艾布納賽爾丁和卓)が信徒を組織して内部からの呼応をはかったという。

この戦闘によって抵抗したカラ・ホージョ城と抵抗を放棄したトルファン城の違いは、上述の『ラシッドの歴史』における「イスラム教の戒律に基づいて分割された」という記述と関連があるかもしれない。すなわち、戦争を経て征服された地域は重税区となり、異教徒は厳しい懲罰を受けるが、抵抗を放棄した地域は和平区であり、住民は「罪悪が赦免される」ことになっていた。カラ・ホージョ城は占領後に徹底的に破壊された。僧侶たちは殺されたり駆逐されたりし、寺廟・文物・典籍等も破壊され尽くされた。これに対して、トルファン城は基本的にもとのまま残され、住民の生活も大きな干渉は受けなかった。新しいイスラム支配者の、この「分割統治」は二つの都城の運命を変えた。カラ・ホージョはもともと高昌国の都城であったが、街は破壊され、住民は離散し、急

(23)片倉もとこ編集代表『イスラーム世界事典』明石書店、2002年、266頁。
(24)前掲書『新疆宗教演変史』313頁。『額什丁和卓伝(察合台文手抄本)』新疆社会科学院宗教研究所所蔵より重引。

速に零落し、再び復興することはなく、今日は観光名所「高昌故城」として残されているのみである。これに対して、トルファン城は破壊に遭わず、仏教も一定期間存在が許されていた。その後はイスラム勢力の統治の中心となり、再び繁栄を回復していった。

ヒジル・ホージャはトルファンの聖戦完了後、さらに1399年、兵を率いてハミ(哈密)やバリゴン(巴里坤)等の攻撃に向かったが、そこは明朝の軍隊が駐屯していた。それゆえ「戦闘は非常に激しく、28日間戦ったが、最後にはヒジル・ホージャとアイブナサールディン・ホージャは殺され、ムスリム軍はトルファンに退いた」という。明軍は1,000人余りのムスリム戦士を捕虜とし、かれらを一つの「アイマク(艾瑪克)」に編成して、甘粛省に送った。アイマクとはモンゴル語で「氏族」「部族」「領地」の意味で、一種の経済・行政単位である。彼らはその後の歴史の中で、回族等の中国ムスリム民族の一部を形成した。

ヒジル・ホージャ・ハーンはトルファンの崖爾城西南のエンムシュ(燕木什)地方(漢名は塩澤)に葬られ、当地の民衆はその墓地を「殉教者のマザール」と呼んでいる。アイブナサールディン・ホージャもここに葬られたという。この遺跡の存在は、ヒジル・ホージャ・ハーンがトルファンやハミを攻撃したという「聖戦」の一つの証明となっている。

４　トルファン仏教の命運：高昌ウイグル王国の衰亡

①高昌ウイグル王国没落の原因

高度な仏教文化を築いて繁栄していた高昌ウイグル王国はなぜ没落してしまったのか？
原因は二つ考えられる。まず、高昌ウイグル仏教の衰亡はチャガタイ汗国時代に始まっていた。13世紀後期、トルファンはモンゴル帝国諸宗王の争奪の地となってしまい、兵火にたびたびさらされた。これは通常「ハイドゥの乱」と呼ばれている。

モンゴル帝国第二代オゴデイ・ハーンの孫ハイドゥ(カイドゥ Qaidu、「海都」)は、1266年セミレチエのエミル河流域で元朝のフビライに反旗を掲げ、1269年にはシル川北のタラス河畔で開かれたクリルタイにおいて、キプチャク・チャガタイ両ハーン家諸王侯の推挙を受けて、中央アジアの大ハーンとなった。モンゴル帝国の東西に二人の大ハーンが並び立つこととなった。オゴデイ家は1251年の第三代モンケ・ハーンの即位時に徹底的な弾圧を受け、諸王たちは領地と軍隊を奪われていた。

1269年のタラス河畔の会盟では、チャガタイ家・オゴデイ家・ジョチ家の三者で帝国の属領であったマー・ワラー・アンナフルの分割を決めると、チャガタイ家のバラクは中央アジア各地の遊牧諸集団を糾合し、1270年イランの領有をもくろんでアム川をこえた。イル・ハーン国(フレグ・ウルス)のアバガはホラーサーンのカラ・スー平原でバラク軍を粉砕した。単騎で逃げ帰ったバラクはハイドゥに殺害された。バラク亡き後の後継者をめぐって混乱するチャガタイ家はハイドゥに操られ、ハイドゥの後見によりドワ(ドゥア)がチャガタイ家の当主となった。アルタイ地方からマー・ワラー・アンナフルにいたる領域に、ハイドゥを盟主とする「国家」が形作られたのである。

東西トルキスタンを支配下にいれたハイドゥは、チャガタイ家第十代当主ドワの部民を挙げて、1301年に死ぬまでほとんど毎年元朝と戦い続けた。ハイドゥが死んでようやく、ドワはチャガタイ・ウルスの旧領を回復し、1303年に元朝およびイル・ハーン国と和睦を結んだ。チャガタイ家はすでに、1260～64年のフビライとアリク・ブガの帝位継承戦争のさい、これまで大ハーンの直轄領であったシル川とアム川間の定住地帯を新たな領地として獲得していたが、この元朝との戦争の

間にもチャガタイ家の所領は拡大し、アフガニスタンからインド北部、そしてビシュバリクを中心として旧ウイグル王国領も支配下にいれていた。ビシュバリクを失ったウイグル王のコチガルは、高昌に退きながらもここを拠点に勢力回復を図ったが、結局フビライの財政・軍事援助を受けざるを得なかった。

ハイドゥの乱のなかで、至元12年(1275年)、ドワは天山ウイグル王国の残された領地トルファンを手に入れるために、12万の兵力でカラ・ホージョ城を攻め、城を包囲すること6ヶ月の久しきに及んだ。城内の住民の食料尽き、財枯れ、城を明け渡して降伏するまで、包囲は続いた。

たび重なる戦乱とほしいままの略奪はトルファンの経済に大きな打撃となった。住民は離散し、田園は荒れ果ててしまい、土地の売買や奴隷の売買が盛んとなり、貧富の格差が激化し、人民の生活は途端の苦しみをなめていた。こうした状況は、トルファンから出土した多くの元代の文書や契約書、あるいは元朝政府がトルファン地区に対して何度も実施した災害救済・流民収容の措置のなかに集中的に見ることができる。トルファン地区の経済は凋落し、人々が生活のよりどころを失っている状況は長期間にわたって回復することはなかった。したがって、農業経済に依存する当地の仏教も不可避的に隆盛から衰亡に向かわざるを得なかった。天山ウイグル王国の次の王ニギュリン自身が1280年すぎにはトルファン盆地をあとにせざるを得ない有様で、かれは甘粛の永昌で1318年に没している。モンゴル帝国時代頃よりウイグル王は「イドゥククト」と名乗りようになったが、イドゥククトの系譜は甘粛においてなお続いていたが、トルファンやタリムの天山ウイグル王国はイドゥククトの手を離れた。歴代ウイグル王の世勲碑が、いまのトルファンではなく甘粛の武夷地方に建てられているのはその象徴的な出来事である。

第二に、仏教社会の内部要因として、トルファン地区も他の地域と同じように多くの寺院と膨大な僧侶階層をかかえていた。状況はクチャの仏教社会と同じであった。僧侶たちは働かずにものを手に入れ、衣食や供養はすべて民衆から受け取り、いわば農民を搾取することによって豊かな生活を送っていたのである。また、僧侶のなかには自身が封建地主や荘園主となって、大量の土地や葡萄園、果樹園を所有し、水力挽き臼や用水路等の生産手段を掌握し、また使役する農奴や家僕を大量にかかえていた。破産した農民たちは寺院や貴族の荘園を頼ることができるだけで、僧侶階層や封建地主の搾取・圧迫を甘受しなければならなかった。

こうして、農民たちと僧侶階層・封建地主との階級対立は激化し、貧窮農民は仏教信仰への疑いや失望の感情を持ち始めた。こうした状況であったので、イスラム教が伝えられると、貧窮農民たちはむしろ伝統的な信仰を捨てて、この新しい宗教の中に精神的な慰めを求めたいと願うようになっていた。イスラム教は貧窮な下層大衆の中にまず信者を獲得したのである。そうした仏教が信頼を失いつつある中で、ヒジル・ホージャがトルファンに「聖戦」を仕掛けたことはトルファンの仏教勢力にとって大きな打撃となったことは疑いがない。

②トルファン占領後の仏教

イスラム勢力のトルファン占領後、トルファンの仏教はその後、どうなったのであろうか。

中国の正史『明史』に記載されたところによると、永楽年間から成化年間(1403 ～ 1487年)にかけてトルファン地区から明朝に派遣された朝貢使節の中には、ムスリムもいれば仏僧もいたという。当初、カラ・ホージョ城の使節の多くは「回回」(ムスリム)であったが、トルファン城の使節の多くは仏僧であった。その後(1420年以後)、カラ・ホージョは二度と朝貢使節を送らなかった。これはカラ・ホージョ城が完全に放棄され、廃墟となったことと関連していよう。トルファン城からの使

節でもムスリムが次第に多くなり、仏僧が次第に少なくなった。そして15世紀後半には、トルファンからの使節は全員ムスリムとなった。

15世紀を通じて、トルファン城では仏教がまだそれなりの勢力で生き残っていたことがいくつかの史料から知ることができる。

第一に、『明史』の記述から、15世紀前半に明朝はトルファン城に僧綱司や国師等の官職を設置して仏教事務を管理させるということさえ行っていたことが分かる。

第二に、1414年にトルファンを訪れている陳誠等の明朝使節がトルファンの状況を次のように報告している(25)。

「トルファン(土爾番)城は火州の西100里(1里は500m)ばかりの所にあり、……城に近づけば、広く人煙がみられ、建物も広がっている。僧・仏法・僧寺が多くある。」

「崖爾城はトルファン(土爾番)の西20里にあり、……広さは2里もなく、住民は100軒ほど。古い寺の建物が多くあり、また石刻が残っている。」

「火州は魯城の西70里にあり、……城の大きさは10里余り、目にするのも物寂しい。昔日は人煙多く、仏堂・仏寺が半分以上であったが、今はみな零落し、東側には荒れた城の基礎跡が見られる。いにしえの高昌国役所だったという。」

「魯陳城では…、回回(ムスリム)の格好(原文は「体例」)」をしている者がある。すなわち、男性は頭をそり、小さな罩刺帽(いかなる帽子か不明)をかぶり、女性は白い布で頭を覆う。また、ウイグル(畏兀爾)のいでたちをしている者もいる。すなわち、男性は髷を結い、婦人は黒いずきんをかぶり、金の曲げが額にある。ともに胡服を着ている。話す言葉ははみなウイグル語である。火州、トルファン(土爾番)、魯陳3カ所の気風や特産はおおむね同じである。」

この報告により、火州＝カラホージョがすでに零落し、また今日の交河故城とおもわれる崖爾城でも衰退が明らかであるとともに、トルファン城ではまだ仏寺が多く見られ、魯陳城(現在の魯克沁を指すと思われる)ではムスリムの存在とともに、「ウイグルの出で立ちをしている者」、つまり仏教を信仰している住民の存在が指摘されている。

第三に、1420年にティムール帝国のシャー・ルフ(沙哈魯、在位1409～47年)が明に派遣した慶賀大使がトルファンを通過した際、住民の大部分がいまだ仏教徒であることを目撃し、「その地には一つの巨大な神廟と一つの偉大な釈迦牟尼像およびその他おおくの偶像があった。これらの偶像の一部は古いものであったが、いくつかは新しく塑像されたものである。」と述べている(26)。

これらの記述から、トルファンはイスラム教地区になったが、仏教は未だ一定の影響を有していたこと、とはいえ仏教衰退の趨勢は充分に明らかであったことが理解できる。では、トルファンのイスラム化はどのように進展していったのであろうか？

5　トルファンのイスラム化

トルファンのイスラム化を促進した出来事は、15世紀中葉にチャガタイ後王がその治所をイリバリクからトルファン城に移したことである。ヒジル・ホージャ・ハーン自身が、トルファン全域

(25)前掲書『新疆宗教演変史』315頁。陳誠、李暹『西域番国志』より重引。
(26)前掲書『新疆宗教演変史』315頁。

を占領した後、そのオルダ(営帳)をトルファン城に移したという。ただその背景には、中央ユーラシアに新たな遊牧勢力が台頭し、モグーリスターンは退勢を余儀なくされたことがあった。すなわち、タシュケント方面はキプチャク草原から南下したウズベク集団の支配下にはいり、またウズベクから分離したカザフはステップ地帯を東に進んでイルティシュ河にいたり、モグーリスターン・ハーン国の有力部族であったドグラト部の一部がカザフに合流した。その結果として、ハーン国はその中心を天山以南のオアシス地帯に移して東方への進出を図り、同時にイスラムへの傾斜を強めて行かざるを得なかったのである(27)。

トルファン遷都以後、トルファン地域はイスラム教が直接管轄する「行政区域(原文は「地面」)」となった。スルタン(速檀、蘇丹)・アリ(阿力)・ハーン、スルタン・アフマド(阿黒麻)・ハーン(1485年頃即位)、マンスル(満速爾)・ハーン(1502/03年即位)はみなここを拠点とし、重大な宗教儀式や慶賀式典の活動をここで挙行した。トルファンのイスラム化の過程で重要な役割を演じたのが、ホージャ・タージュッディーンという人物である。かれはトゥグルク・ハーンを改宗させた聖者アルシャドゥッディーンの子孫であるとされ、若い時にマー・ワラー・アンナフルに赴いてナクシュバンディー教団の中興の祖、ホージャ・アフラールの教えを受け、師の命によってアフマド・ハーンのもとへ遣わされて以来、アフマド、マンスール父子の宗教的指導者であった(28)。

1495年(弘治8年)の8月、スルタン・アフマド・ハーンはトルファンに行ってクルバン(虎爾班、古爾邦節)を執り行なったという。大体この頃には、トルファン地区の住民は強制されたり、王室に従ったりして、すべてイスラム教に改宗していたと見られる。クルバンはアラビア語からの音訳とされるが、通常はイード・アルアドハーといわれ、「犠牲祭」と訳される。ヒジュラ暦(イスラム暦)の巡礼月(12月、ズー・アルヒッジャ月)の10日から13日にかけて4日間続く。10日はメッカ巡礼の最後にあたり、巡礼者は動物犠牲を捧げるが、これに合わせてイスラム世界では各家庭でいっせいに犠牲を屠る。祭日期間中、人々は沐浴し、晴れ着を着て外出し、相互に訪問しあったり祝いの言葉を交わして喜びあう。遠方の友人・知人にはお祝いのカードを送るのが習わしである。犠牲として捧げられる動物はラクダ・牛・ヤギなどで、屠殺の方法は、動物の顔を聖地メッカに向け、アッラーの名を唱えながら、その頸動脈を一気に切るというものである(29)。

16世紀初めの明朝官員の報告は、「1回目の盗みは賠償を命じられ、2回目の盗みは片方の手を斬り、3回目は処刑される。……けんかをした者や悪事を働いた者はマウラー(満刺、毛拉、ムッラーともいう)のところで処罰される。……女性はおよそ11、12歳になるとみんなマウラーから夷字(アラビア文字を指すと思われる)を学び、ただ天地を礼拝するのみで、仏教は信仰しない。」と記載している。この時には、住民の生活は完全にイスラム法のもとに組み込まれていたことが理解できる。

(27)濱田正美「第六章 中央ユーラシアの周縁化　②東トルキスタン」、小松久男編『新版世界各国史4 中央ユーラシア史』山川出版社、2000年、298頁。
(28)濱田正美「第六章 中央ユーラシアの周縁化　②東トルキスタン」、前掲書『新版世界各国史4 中央ユーラシア史』299頁。
(29)日本イスラム協会ほか編『新イスラム事典』平凡社、2002年、114頁「イード」の項。

おわりに：トルファン地区のイスラム化の意味

10世紀にカシュガルにイスラム勢力が侵入してから約500年後に、イスラム勢力はついに西域三大仏教盛地の最後の拠点、トルファンを武力でもって占領することに成功した。高昌国の王都カラ・ホージョは徹底的に破壊され、再び復興することはなかったのに対して、現在のトルファン市の街となっている土爾番城は破壊されることなく、住民はこれまで通りの生活を維持することができ、仏教勢力はまだ生存し続けていた。しかし、15世紀中葉に東チャガタイ汗国の王城(オルド)をトルファンに遷都させるという出来事は、トルファンにおける仏教勢力の消滅を加速させ、イスラム化の完成を実現させた。

トルファンのイスラム化の意味について考察する前に、トルファン遷都のモグーリスターン・ハーン国に与えた歴史的意味について一言しておこう。トルファン遷都は、上述のように中央ユーラシアに新たに勃興したウズベクやカザフといった遊牧集団に圧迫されてのことであったが、それはまたモグーリスターン・ハーン国の軍事的弱体化をも意味していた。モグーリスターン・ハーン国は本来遊牧国家であり、その構成要素である遊牧部族を左右両翼に組織していた。しかし、天山以南のオアシス地帯への移動により、武力集団としての遊牧部族に不可欠な家畜群、とりわけ馬群の維持が困難となった。ユルドゥズ渓谷を除いて、タリム盆地の周辺には大規模な牧地は存在しなかったからである。基本的には戦士であったはずの遊牧モグール人たちがオアシスに定住して武力装置としての部族の機能が低下したことは、草原を失い定住化したことの必然的な結果であった(30)。

近年、日本の中央アジア史学界では、シルクロードには「東西」の交流と「文明の通り道」のイメージがつきまとい、ややもすれば現地の歴史や文化を無視する傾向が強まったことから、中央アジア史を叙述する時にはシルクロードという述語やテーマははずすべきだという議論が高まっている。しかし、森安孝夫は、これは中央アジア史からシルクロードを学問的に抹殺しようという動きであると批判し、シルクロードの重要性は遊牧騎馬民族の軍事力を中核とする中央ユーラシア型国家がモンゴル帝国という世界帝国に結実する13－14世紀まではいささかも減じていないと断言している(31)。そのシルクロードがシルクロードの重要性を減じる前の最後のシルクロード商人の役割を担ったのがウイグル商人であったといえるでろう。

最後に、トルファン地区でのイスラム化の実現は新疆の歴史上どのような意味を持ったのかを考察すると、トルファン地区の住民のイスラム改宗は近代ウイグル民族の形成に対して決定的な意義を持ったということが指摘できる。

宮脇淳子は中央ユーラシアにおける民族と宗教の関係について次のように述べている。すなわち、「モンゴル帝国の継承国家のうち、キプチャク系とチャガタイ系はすべてトルコ民族として分類され、宗教的にはイスラム教徒になった。元朝ハーン系だけがモンゴルと呼ばれ、チベット仏教の信者である。宗教と民族の分布がここでは完全に重なる。モンゴル帝国の後裔が現在トルコ系民

(30)濱田正美「第六章 中央ユーラシアの周縁化　②東トルキスタン」、前掲書『新版世界各国史4 中央ユーラシア史』301頁。

(31)森安孝夫「シルクロード『学』へのまなざし」、前掲書『NHKスペシャル　新シルクロード1　楼蘭：四千年の眠り／トルファン：灼熱の大画廊』200頁。

族とモンゴル系民族に分かれるその分岐点において、宗教が果たした役割が実は非常に大きかったのではないかと筆者は考えている。宗教は強い求心力をもち、精神生活と言語に影響をおよぼす文化そのものだからである。」(32)

16世紀初めの時点でハミ地区をのぞいて、天山以南のすべてのウイグル居住地域では、それまでの多宗教の共存といった状況、と同時に宗教信仰の違いから生み出された相互対立、および多様な文化・風俗・文字等が存在していたという状況がもはや存在しなくなった。イスラム教はウイグル民族のすべての人々が共通して信仰する宗教となり、トルファン盆地周縁で生活する住民とタリム盆地周縁で生活する住民の文化的背景が一致する方向に向かい、次第にイスラム教を核とした共通の文化・風俗、共通の心理が形成された。言語文字の面でも、かつてトルファンでは17種の言語が24種の文字で書き記されていたこともあったが、アラビア語のアルファベットで書写されたウイグル文字が次第に古代回鶻文字に取って代わり、ウイグル民族が統一して使用する文字となった。

明代の『高昌館来文』に収録されたトルファンやハミの文書から見ると、14～15世紀にはトルファンではまだ回鶻文字が依然として使われていたが、16世紀になると「回回文字の文書」(アラビア語のアルファベットで書写されたウイグル文字の文書)と「番文」(回鶻文字で書写された文書)が併用されるようになった。が、まもなく回鶻文字文書は完全に消失してしまったのである(33)。

(32)宮脇淳子「第Ⅱ章 伝統と変容　1 モンゴル帝国の後裔たち」、護雅夫・岡田英弘編『民族の世界史4 中央ユーラシアの世界』山川出版社、1990年、337頁。
(33)前掲書『新疆宗教演変史』316頁。